

コリント人への手紙第一 1 章 26 節～2 章 5 節 「誇る者は主を誇れ」

小池 宏明 牧師

大都会コリントにあるキリスト教会が抱えている問題の一つが、仲間割れや分派であった。パウロは、この問題の原因の一つが人間の高ぶりにあることを気付かせようとしている。

*誇る者は主を誇れ

26 節「兄弟たち、自分たちの召しのことを考えてみなさい。人間的に見れば知者は多くはなく、力ある者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。」
「召し」とは神様から呼び出されることを意味する。神は取るに足りないものをあえて選び出して下さったのだ。27 節「しかし神は、知恵ある者を恥じ入らせるために、この世の愚かな者を選び、強い者を恥じ入らせるために、この世の弱い者を選ばれました。」召し出された信徒たちの「愚かさ」や「弱さ」は、「神の力」と「神の知恵」をかえって証しすることになる。それは、30 節「肉なる者がだれも神の御前で誇るがないようにするためです。」私たちがまさに、この世の知恵に頼っている者であった。弱くて、愚かで、無きに等しい者だ。しかし、主なる神様は、あえて、そのような私たちを選び出された。それはこの世の知恵者に自分の愚かさや弱さを気付かせて、主の御許に立ち返らせるためなのだ。

もし、誇りたいのであれば、自分のことではなくて、愚かで弱い自分を救い出して下さった主イエス様を誇りとしなさい。(31 節)

*私たちの場合は

私たちが、どこから召し出されて救い出されたのか思い起こそう。私たちは、どんな虚しさやどんな暗闇やどんな罪咎から解放され救い出されてきたのだろうか。それは自分から出たことでは無い。自分の知恵や力で見出して、辿り着いたわけではない。人間の知恵によらず、神様の力によって救い出されたのだ。それゆえ、私たちは、自分を誇りとするのではなく、救い主イエス・キリストに見つけ出されたことを誇りにしよう。

まだ、救われていない方々にも、救いは人間の努力によることではないことを知っていただきたい。ただ、できることは、主イエス・キリストが私のために、十字架にかかって死んで下さったことを受け入れて信じることなのだ。主なる神様からの呼びかけを受け入れてほしいと願う。